

女子学生の下着の透けに対する意識調査

Women's Students Survey on the See-through-ness of Underwear through the Outer Wear

村上真知子

Machiko Murakami

Abstract

Recently women's students wear see-through blouses and skirts using tulle lace, tulle, chiffon and organza as daily garments. And they sometimes wear white blouses under the dark suits. In these cases the outline and color of the underwear as to camisole and tank top can be seen. As for the transparent skirts, not only underwear but also the shapes of legs are seen through. See-through look was presented by Eve Saint Laurent in 1968 and has been in fashion. And elegance and grace of the thin transparent fabric have been popular among women. But the see-through-ness sometimes cause senses of discomfort for person who watch the too much transparent feature and feel the norms of the society. In this study, women's students attitudes for the see-through-ness of their under wear and actual wear conditions for the white and black outer wears are reported. In addition, their actual applications of the transparent fashion on the daily coordination are surveyed.

Keywords :underwear, see-through-ness, thin fabric outer wear

1. 緒言

近年の女子学生をはじめとする女性の衣服には、日常着においてもレース、チュール、シフォンジョーゼットなどのような透け感のある素材が多く使われている。またこれらの透け素材は、ブラウス、カットソーなどのトップスばかりでなく、スカートにまで及んでいる。春夏シーズンには「白コーデ」といわれる白い上下の組み合わせや、スリムな白パンツを用いたコーディネートも年代を問わず人気がある。黒を用いた衣服は、上記の素材を用いて、透け感による軽さがポイントのコーディネートも多く見ることができる。

一方、看護師が制服を着用する際や、就職活動やフォーマルな場においてダークスーツ下に白いブラウスを着用する際の、下着の透けに関する問題がある。また、日常の衣生活においても、白いスカートやパンツから透けが気になる下着の色、柄、ラインや、透けて見えることに着用者は気付かずにいるものの周囲が不快に感じる場合など、透けにまつわる問題も多くある。

衣服の透け現象に関しては、吉野らによる衣服の透け現象に関する研究¹⁾²⁾で、透けの特性を皮膚の色、下着の色の測色データから考察している。また、小林らは、テキスタイルの視覚印象と織構造の関係を、テキスタイルの下に白と黒の色紙を置き、テキスタイルを通して見える下地の色の印象について考察している³⁾⁴⁾。また、透けるテキスタイルを通して見える水玉柄の視覚印象評価を行って

いる⁵⁾⁶⁾。また、下着メーカーのトリンプ・インターナショナル・ジャパン株式会社では、2016年2月に40代後半から50代前半の女性を対象として、下着に関する意識調査を行っており⁷⁾、下着に対する女性の意識が20年間で大きく変わっていることを明らかにしている。また、同社では2008年に、国別のブラジャーに対する意識の違い⁸⁾や、2009年には男性の真夏のビジネススーツと下着に関する調査⁹⁾を行っており、その中で透けに関する結果を見ることができる。一方、素材メーカーサイドでは、透けない白い水着の研究が行われており、加藤らはその概要についてまとめている¹⁰⁾。

このような外衣を通して透けて見える下着に対する問題は、「あえて下着を見せる」コーディネートの効果をねらう場合と、「下着のラインは見せたくないのに見えてしまう」場合がある。筆者は、学生の衣服の着用状況を見る中で、時として外衣から透けて見える下着について疑問を抱くことがある。そこで本研究では、現代の女子学生が、どのように下着を着用しているのか、また、このような透けに対して、どのように考えているかを明らかにするために、アンケート調査を行った。

2. 調査方法

女子学生の下着の着用状況および、透けを利用したコーディネートに関しては、以下のような内容について実施した。調査対象は本学1年生で、前期に開講されている「生

女子学生の下着の透け感に対する意識調査

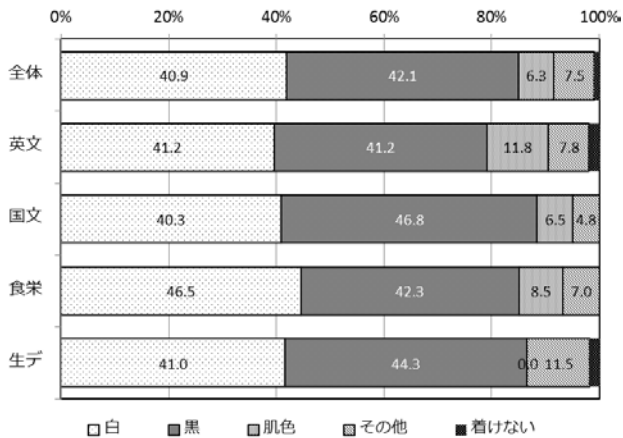


図1. 白のアウトターの下に着る肌着の色

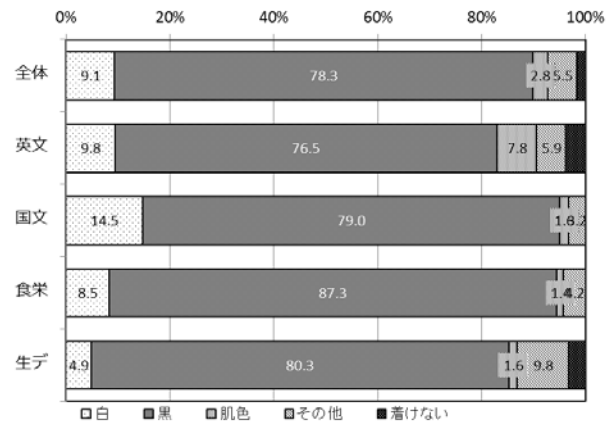


図2. 黒のアウトターの下に着る肌着の色

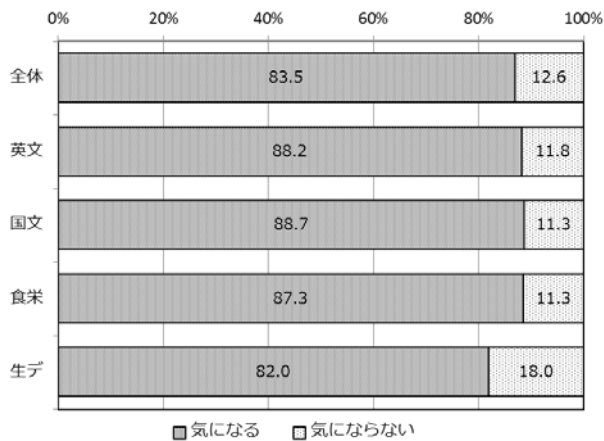


図3. 白いボトムスの下の下着に対する意識

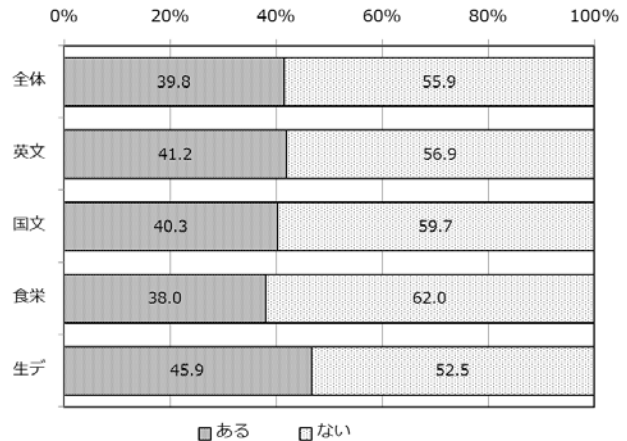


図4. 透けをコーディネートに取り入れた経験

活と環境」の受講学生である。筆者が担当する衣環境分野の講義の終了直前に調査を行った。調査日は、2016年5月12日で、入学してからほぼ1か月を経過している。

調査項目は、設問(1)入学式のスーツのインナーに着たシャツブラウスのような白いブラウスや、やや透ける白いセーターの下に着る肌着として、何色を着ることが多いか、設問(2)やや透ける黒いブラウスや黒いセーターの下に着る肌着として、何色を着ることが多いか、設問(3)やや透ける白いスカートやジーンズや白パンツを着用する場合、下着が透けて見えるかどうかを気にかけるか、設問(4) (3)で気にかけると回答した場合、どのような対策をとっているか、設問(5)ブラウスやパンツなどの「透け感」をファッションに取り入れたコーディネートをするかがあるか、設問(6)(5)であると回答した場合、どのようなコーディネートをしたことがあるかと、基本情報として所属学科、年齢、18歳まで住んでいた所についてである。

回答用紙は授業終了後に回収した。回答数は、245で出

席者のほぼ全員が回答した。設問(1)、設問(2)は①白、②黒、③肌色・ベージュ、④①から③以外の色、⑤着ない(ブラジャーのみ)、から一つを回答することとし、設問(3)は気に掛けるか気に掛けないか、設問(5)はあるかないかから一つを回答する。設問(4)、設問(6)は自由記述である。

回答した学生総数は245名で、その95%が18~19歳である。本学入学までの居所は、受講生全体では岐阜市及び岐阜県在住が全体の50%、次いで名古屋市及び愛知県在住が22.5%、東海・北陸が11.4%であった。学科別では、国際文化学科では、岐阜市・岐阜県在住が61.3%を占めるのに対して、生活デザイン学科では、41%で、名古屋市・愛知県在住では、国際文化学科が14.5%であるのに対して生活デザイン学科は29.5%となっていた。

3. 結果と考察

図1は、設問(1)の回答、図2は設問(2)の回答結果を示している。外衣が白いブラウスなどの場合、中に着ている

女子学生の下着の透け感に対する意識調査

下着等の色、柄、輪郭などは、比較的はっきりと透けて見える。設問(1)の結果では、白のインナー着用者が、全体として41%という一方で、黒のインナー着用者がそれを上回る42%であった。筆者が日ごろ接することが多い生活デザイン学科の学生では44%にのぼる。また、肌色・ベージュの肌着を着用する学生は、全体では6.3%で、生活デザイン学科の学生を除いて数パーセントから12%近くまでいる。一方、白、黒、肌色・ベージュ以外の色の下着を着るという回答が、全体としては7.5%、生活デザイン学科の学生では11.5%にのぼった。具体的な色としては、ピンク、グレイ、水色、青、カーキ、寒色系などを挙げている。上半身の衣服の中に着る肌着としては、透けて見えないように肌色・ベージュを選ぶことが多いといわれている。また、吉野らの実験¹⁾²⁾でも、白い衣服素材は透けやすいが、肌との色差の小さい肌着が透けて見えにくいと判断されるという結果が得られている。しかし、学生の半数近くが、黒をそしてその次に白を着用しているという結果は、下着選択の基準として別の要素があると考えられる。

図2では、黒い外衣を着用するときの肌着の色の結果である。黒い外衣に対して白い肌着を着用する学生はかなり少なく、全体として10%に満たない割合で、80%は黒い肌着を着用すると回答している。また、2%程度が肌色・ベージュを着用すると回答しているほか、その他の色として、ピンク、グレイ、青、ボルドーなどを挙げている。

筆者をはじめとする生活デザイン学科の教員がファッションショーの着装を指導するとき、あるいは就職活動の指導をする際に、よく白のブラウスの下に「無造作に」黒いインナー(主にキャミソール、タンクトップの類)を着用する学生に出会う。学生にとっては、下着が透けて見えないように、インナーの色に気を遣うということは、まったくないように思える。

トリンプ・インターナショナル・ジャパン株式会社が2016年2月に行った下着に関する調査において、65~79歳女性が45~54歳のころに選びがちだった下着の色として、「ベージュやピンクなど肌な地物良い色を選んだ」と回答した割合が70.3%だったのに対して、現在45~54歳の女性がこれらを選ぶと回答した割合は55.3%だったと報告している⁹⁾。また、同調査では、この年代の女性は、下着を単に肌なじみの良さばかりでなく、着心地、デザイン、品質などにおいても満足のいく商品を選択しているという結果も得られている。多様な外衣素材への対応、女性の様々な要求への対応として、下着は「透けない」とか、「肌なじみが良い」という性能ばかりでなく、下着であってもデザイン的に美しいものを身に着きたいという願望

が、近年高まっていることを見る事ができる。必ずしも肌との色差の少ない肌色・ベージュにとどまらず、様々な色の下着が試みられている。

図3は、白いスカートやパンツを着用するとき、下着が透けて見えるかどうか気が掛けているか、気に掛けないかに対する回答結果を示している。全体で、83.5%の学生が気に掛けていると回答している。近年、スカートではチュール素材が多く用いられており、ティーン世代からミセス世代にまで広がっている。若い女性に対しては、裏地の上にチュール素材を重ねたギャザースカートや、チュール、チュールレース、オーガンジーだけでスカート状に仕立て、パンツの上に重ね履きするコーディネートなど種類も多い。近年の春夏コレクションでも多くのデザイナーがシースルーコーディネートをとりいれている。また、パンツにおいても特に春夏シーズンでは白いボトムとのコーディネートが相変わらずの人気である。しかし、スカートにおいては、下着のラインが見えるばかりでなく、両足まで透けて見える場合がある。今回の調査では83.5%にあたる212名が、下着が見えるかどうか気に掛けていると回答しているが、具体的にどのような対策をとっているかについて自由回答の形で回答してもらった結果、「スパッツをはく」が25%、「黒い下着をはく」が20.3%、「白い下着をはく」が10.8%であった。また、このほか、「ペチコートをはく」、「長い上着を着る」や、「試着などで透けないものを選ぶ」、「見せパンをはく」、「そのようなスカートやパンツは着ない」という回答もあった。また「派手な下着をつけない」という回答もあり、学生の下着の着装状態自体も年代とともに変化していることがうかがえる。また、学生たちがとっている対策でも、透ける現象そのものに対する対応策ではなく、透けて見えてもこの程度までは仕方がないと感じているのかもしれない。

図4は、自身の着装の中に「透け」を取り入れたコーディネートをしたことがあるかについての回答結果を示している。チュール、シフォン、オーガンジー、レースなどの透け素材を使ったファッションアイテムが多く出回っているが、全体としては40%前後の学生が「ある」と回答している。生活デザインの学生では、他の学科より多く、46%が日常のコーディネートで使っていると回答している。具体的には、白または黒のモノトーンのコーディネートで、短いマット素材のスカートの上にシースルーのスカートをはく、透けるブラウスのインナーに柄ものや色物のチューブトップを着る、袖がシフォンなどの透け素材になっているブラウスやワンピース、総レースのトップスに白いキャミソールを着る、などを挙げている。

4. まとめ

本調査では、透けて見えるのは困ることを前提とした立場で、衣服の透けに対して学生の着装実態を調査した部分と、透けを積極的にファッションに取り入れる立場からの調査の両面からの実態を調査した。これらの着装の結果、どのように見えるか、それをどのように感じるかという感性評価には及んでいない。今回の結果を踏まえて、学生がこれから見につけていくべき服装のルール、社会規範と流行による美意識の変化とのバランスに対する指針を見つけていく必要がある。

透ける装いは、イヴ・サン・ローランが、1968年春夏コレクションで **See-through Look** を発表してセンセーションを呼んだスタイルである。以来、オーガンジー、ボイル、シフォン、レーシーニットなどを用いて、ボディを透かして見せるファッションとして人気が高く、これらは、女性らしさ、優美さを表現するデザインには必要不可欠な素材である。これらを日常の衣服にも有効に活用して、より幅の広い豊かな衣生活に資することができればと考える。

文献

- 1) 吉野鈴子, 明石淳子, 山中富世界, 堀田英志; 繊消誌, **41** (8) pp682 - 699 (2000)
- 2) 吉野鈴子, 明石淳子, 山中富世界, 堀田英志; 繊消誌, **41** (12) pp 963 - 970 (2000)
- 3) 小林未佳, 森川陽; 感性工学研究論文集, **6** (2) pp39-44 (2006)
- 4) 小林未佳, 森川陽; 感性工学研究論文集, **7** (4) pp859-866 (2008)
- 5) 小林未佳; 文化学園大学紀要, **45**, pp29-35 (2014)
- 6) 小林未佳; 感性工学研究論文集, **14** (2) pp305-314 (2015)
- 7) www.triumph.com/jp/ja/news20160426_02.html
- 8) www.triumph.com/jp/ja/5996.html
- 9) www.triumph.com/jp/ja/cw_press_20090520_2.html
- 10) 加藤哲也, 丹羽氏輝; SEN-I GAKKAISHI (繊維と工業) **51** (7) p-294 - P-296 (1995)

(提出日 平成 29 年 1 月 10 日)